
その者の拳は滅殺の拳

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その者の拳は滅殺の拳

【Nコード】

N5695Y

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

リリカルなのはの世界に降り立った一人の格闘家・・・彼はこの世界にどのような変化をもたらすのか・・・

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家（前書き）

この作品は思いつきで書いたんですけどよろしくお願いします。

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家

俺は今少しだけ困っていた・・・

「参ったな何故かは分からないが俺の中の殺意の波動が揺らいでいる・・・。」

これでは次元転移ができない・・・この世界的环境下では修業の質が高まりそうにないから早く何処か別の世界に行きたかったのだが・・・。

「この世界・・・実は何か特殊な物でもあるのか？」

でなければ俺の殺意の波動は揺らぎはしない・・・。

「少し探るか・・・ん？。」

俺は足の下に違和感を感じたどうやら何か踏んだようだな・・・。

「何だこれは・・・？」

俺が踏んでいたのは石だったしかしこの石ただの石ではないな・・・。

フエイト Siad

私とアルフがジュエルシードを探していると一人の男の人がいた・・・あれは！？ジュエルシード・・・まさかあのジュエルシードを狙ってるの？

「おいそのアンタその手に持つてる者を渡しな！」

私が思想に浸ってる間にアルフが男の人にジュエルシードを渡すように言っていた素直に渡してくれればいいけど・・・。

「嫌だと言ったら？」

「力ずくで奪うよ！」

「ちよっ、アルフ！」

「大丈夫だよフェイトあいつ魔力を感じないしちゃんと加減してすぐ終わらせるさ！」

「それならいいけど・・・。」

男の人 Siad

すぐに終わらせるか・・・相手の実力も分からんようではこの世界の奴らの実力もたかが知れているな。

「すぐに終わるといいがな。」

「心配しなくてもすぐに終わるさ！」

あのアルフとか言う奴が攻撃を仕掛けて来た・・・この世界ではあのスピードを早いと言うのだろうが・・・。

「遅すぎる。」

シャッ、ビッ。

「あ・・・あれ？あの男は・・・。」

「後ろだ・・・。」

「なっ、いつの間に!？」

「貴様では俺に勝てん・・・。」

「何でそう断言できるのさ!」

「貴様は俺に魔力が無いと言う理由で勝てると思ったみたいだが・・・。」

「普通そう思うだろ!」

「普通か・・・戦いにおいては多くの要素が入り交じる・・・魔力が無いそれだけで相手を甘く見るのはどうかと思うぞ。」

「うっ・・・それは・・・。」

「それとその金髪の少女・・・フェイトと言ったな何故、攻撃をして来ない今の俺はお喋りをして隙だらけだと思わなかったのか?」

「え・・・そっ、それは・・・。」

「考えられなかったのか？俺の話を聞くのに少し集中してしまっ
て？」

「はっ、はいそうです・・・。」

「ふむ・・・そうか相手の話しに耳を傾ける事は別に悪い事ではない
がな。」

素直な子と言う所か・・・。

「アンタ何者だい・・・？」

「俺は・・・」

「よっしゃー！ここからはじまるぜー！」

「なっ、何だい！？」

「むっ・・・（大きめの気が現れた・・・。）」

転生者 Siad

いたよいたぜフェイトちゃんがそれにアルフも！・・・なんかしら
ねー男もいるが無視だ。

「ねー彼女達ちょっといい！」

「何だいアンタ？」

「ジュエルシード集め手伝ってあげるよー。」

「何でジュエルシードの事を！？」

「ジュエルシード・・・？（もしかしてこれが・・・。）」

「大丈夫、俺さあ君たちの味方だから・・・あ、それと俺の目さあ二人ともちよつと見てくんない。」

魅惑の魔眼発動！これで二人は俺の・

グサ。

「イッテエ！目が目があああー！！」

「ちよつ、アンタ何いきなり目潰してんの！？」

「こいつが変な術を発動しようとしたからだ。」

「変な術！？」

「あれは恐らくチャームの類だな。」

「チャームだつて！？」

「目イテエ・・・くそツメエよくもやりやがったな！それにばらしやがって！こうなりや力ずくだ！」

男の人 Siad

力ずくか・・・確かにこの世界のレベルでは尋常ではない気の量だな・・・。

「戦うのか？」

「何だびびってんの！だろうな、なんたって俺は巨大な魔力と魔法以外にも超サイヤ人並みの気を持ったハイブリッド転生者びびってもしかーねえよギャハハツ・・・」

ドゴン！

「隙だらけだ・・・。」

「いつ、いつのまに・・・しゃべってる最中にきつ、きたねえぞ・・・」

「戦いの最中に喋る奴が悪い。」

「あ・・・ぐつ。」

どうやら気絶した様だなそれにしても転生者とは・・・。

「あつ、あの助けてくれてありがとう。」

「別に礼を言われる様なことはしていない。」

「いや・・・あの变なの魔力は実際巨大だったアタシたちじゃ勝てなかったと思う。」

「確かにな。」

「何かアイツ、アタシ達狙ってたみたいだしそれを倒したアンタには礼を言っよ。」

「そうか・・・。」

「あつ、あのジュエルシード・・・。」

「んっ？これか・・・こんなの別に要らんしな・・・やる。」

「あつ、ありがとう・・・。」

「さて行くか・・・。」

「どこにいくんだい？」

「さあ・・・？」

「さあつて・・・。」

「あつ、あのよかったら家に泊まっていきませんか？」

「いいのか？」

「はい、助けてもらった恩もありますし。」

「そうかありがとう助かったよ、この世界にはまだ不慣れだね。」

「この世界？アンタ別の次元の人間かい。」

「ああ、そうだ。」

「あの一つ聞いていいですか？」

「なんだ？」

「名前なんですか？」

「そうかさつきは言えなかったな・・・俺の名前は、キルアだ。」

「キルア・・・キルアさんですね。」

「フエイトゥ早く家帰ろうお腹減ったよー。」

「うんそうだねアルフ帰ろうか・・・キルアさんもほら一緒に。」

「ああ分かった。」

しかしあのジュエルシード言う石ただの石では無いようなんだが何故あんな少女が集めているんだ・・・それに転生者とは・・・まあ今考えても仕方ないな・・・。

リリカルなのはの世界に舞い降りし格闘家（後書き）

フェイト「小説どうでしたか？できれば次も見てください！」

キルア「よろしく頼む。」

キャラ紹介（前書き）

キルアのキャラ紹介です。

キャラ紹介

キルア

次元を渡り歩く旅の格闘家、旅の目的は己の中の殺意の波動を完全に克服する為である。

能力

殺意の波動（次元転移の為に使用はしているが戦闘では滅多に使わない。）

技

暗殺拳をベースに強化した技を使う。

性格

人に厳しく自分に厳しい性格、戦いにおいては非常に冷静。

見た目

黒い胴着に身を包んでいる。

髪は少し跳ねっ毛の黒髪。

目の色は青色。

身長は178cmである。

荷物袋を持っている（ストリートファイターのリュウのものと見た目は同じ）

バカな転生者

こいつ今後でるかな・・・。

リリカルなのはの世界でハーレムを目論む・・・こいつだけじゃないけど

技

正直どうでもいい。

性格

バカ

能力

キルアにとってはたいしたことなし

見た目

別にこいつの見た目なんか読者様も知りたくないと思う。

転生者「おい俺の紹介いいかげんだぞ!？」

作者「だってただの字数稼ぎだもん。」

転生者「テツメエ!」

作者「キルアさん黙らせてください。」

キルア「分かった。」

ガン!

転生者「ひでぶう!」

作者「読者の皆様これからもよろしくおねがいします。」

キャラ紹介（後書き）

作者「本当はキルアの紹介だけで良かったんだけどな・・・。」

キルア「ネタに影響がでるから出せないものがあつた・・・だからどうでもいい奴で字数稼ぎ・・・と言う所か・・・。」

作者「うんそうだね。」

フェイト「キルアの語られない部分・・・気になる。」

作者「それは物語でおいおいね・・・読者の皆様これからもよろしく
お願いします。」

意外にも料理が出来る格闘家（前書き）

作者「今回は少しほのぼの系かな？」

意外にも料理が出来る格闘家

「ふむ・・・これは良い所に住んでいるな。」

フェイト達の住んでいる場所は明らかな高級マンションだった・・・。

「キルア、ご飯の用意するね。」

「ああ・・・頼む。」

「もぐもぐ・・・。」

「ん？」

アルフはすでに何か食べているようだった見てみると・・・

「・・・ドックフード？」

「何？キルア？」

「いや・・・何でも・・・。」

「そう？」

アルフは狼の使い魔だと思うのだが・・・まあ狼でもドックフードを食べることはあるだろうな・・・。

「キルアー！ご飯出来たよ！」

「ん？随分早いな・・・カップラーメン？」

「え・・・嫌いだった？」

「いや、そうでは無い、いつも食べてるのか？」

「うんそうだよ？」

「そうなのか・・・育ち盛りにカップラーメンを毎日・・・これは悪いな・・・」

「仕方ない・・・俺が作ろう・・・」

「えっ？」

「育ち盛りにこんな物ばかりではいかんからな・・・」

「キルアって・・・料理できるの？」

「出来るぞ。」

「意外だねえキルア、アンタ見た目からして格闘家だろう、ただ焼いて食うしかできないと思ったよ。」

「かつてな格闘家のイメージを付けるな。」

「確かに調味料が無い場合が多いから大方単純な食べ方になるだろうが・・・」

「さて・・・冷蔵庫の中は・・・空だな・・・」

「じつ、じめんなさい。」

「いや・・・別にいい、無ければ採って来ればいい・・・。」

「アンタ・・・今、買ってくるじゃなくて採って来るって言った？」

「言ったが？まあ狩っても来るが。」

「じゃあ、お金渡すね。」

「ああ米と調味料の分だけでいいぞ。」

「え？それだけ・・・？」

「他のは金がかからんからな。」

「なんで？。」

「たぶんキルアの奴、自然にある奴採ってくる気だ・・・。」

「それって大変じゃあ・・・。」

まずはスーパーで米と調味料だ・・・次に野菜だな・・・山菜なら山にあるだろう・・・次は海で魚でも狩るか・・・。

「行つて来る・・・。」

こうして俺は材料をとりに行った・・・すぐに戻るが・・・。

「行っちゃったね・・・」

「そうだね。」

「戻ったぞ。」

「早っ!？」

「別に驚かなくてもいいだろう・・・」

「いや、驚くよ!てか何その巨大な魚!？」

「マグロだが・・・。」

「マグロって・・・何か本当、凄いねアンタ・・・。」

「早速作るか・・・しばらく待っているフェイト」

「う・・・うん。」

「一体どれほどのものが出来るんだろうねえ・・・。」

「楽しみにして待ってよアルフ。」

「さて・・・マグロは切り分けて使わない分は冷蔵庫に入れよう・・・
マグロは軽く醤油で煮付けるかな・・・。」

山菜は・・・味噌汁にでもするか・・・では始めるか・・・

「まだかねー。」

「もうすぐだと思うよアルフ。」

「出来たぞ。」

「うわぁ・・・凄い。」

「こりゃ美味しそうだ。」

「いただきます！」

「この煮付け美味しいねえ。」

「アルフ・・・さっきドックフード食べてなかったか？」

「こんなの見てたらお腹減っちゃたんだよ。」

「まあ・・・多めに作ったし別にいいが・・・。」

「この味噌汁も美味しい。」

「そうか・・・それは良かった。」

「誰かの作ったものってあったかいね・・・。」

「ん？何か言ったか・・・フェイト？」

「ううん・・・何でもない。」

「そうか・・・では俺も食べよう。」

こうして俺達は三人で食事を楽しんだ・・・。

意外にも料理が出来る格闘家（後書き）

フェイト「キルアの料理、美味しかったね。」

アルフ「そうだねフェイト。」

キルア「喜んでくれてなによりだ・・・。」

作者「次回もどうか読んでくださいね！」

石集めを協力する事にした格闘家（前書き）

今回プレシア登場です！

石集めを協力する事にした格闘家

フエイト S a d e

「あの・・・キルア、ちょっといいかな？」

「何だ？」

「お願いがあるんだけど・・・。」

うう・・・キルア、お願い聞いてくれるかな？

「ジュエルシード集め手伝ってくれる・・・？」

「あの石集めか・・・分かった手伝おう・・・。」

「本当！」

「ああ・・・本当だ。」

「やったあ！」

えへへ・・・キルア、手伝ってくれるんだ。

「何を喜んでいるんだいフエイト？」

「キルアがジュエルシード集め手伝ってくれるって！」

「本当かい！確かにキルアは凄まじい力を持つてるから協力してく

れると嬉しいね!」

「うん、だよな。」

「・・・でもキルア本当にいいのかい?」

「何だ?」

「アンタ見たところ旅の最中みたいだけど・・・何か目的があるんじゃないか?」

「あつ。」

確かにキルアは旅の最中みたいだ・・・私の願いで足をひきとめるのは・・・

「その事なら気にしないでいい、目的はあるが・・・それは急がなくてはいけないことではない。」

「本当!」

「こりゃ頼もしい仲間が出来たね。」

えへへ・・・キルアと一緒にジュエルシード集めてくれる・・・嬉しいな。

キルア S a d e

ジュエルシード・・・あの石は明らかにこのような少女・・・フェイト

が欲しがる物ではない・・・では誰が・・・

「キルアに協力してもらおう事、母さんに報告しなきゃ。」

「プレシアの所に行くのかい・・・？」

むっ・・・アルフの表情が暗くなっただな・・・それに母さんに報告・・・
プレシアの所・・・そういう事が・・・。

「キルア、ちよつと一緒に来てくれる？」

「ああ・・・分かった。」

「じゃあ・・・行くよ、次元座標876C4419・・・。」

・
転移の魔法か・・・ジュエルシードを欲しがっているのは・・・恐らく・・・

「『時の庭園』テストロッサの主の下へ！」

時の庭園・・・

「少し変わった空間だな・・・。」

高次元空間・・・と言う所か・・・

「キルア、行くよ。」

「ああ・・・分かった。」

「母さん・・・失礼します。」

「何かしら・・・フェイト・・・あら、その男は？」

何だ・・・あの目は・・・娘を見る目じゃないぞ・・・いや・・・冷たいものとは別のものも感じられるな・・・

「あの・・・ここにいるキルアにジュエルシードを集めを手伝ってもらう事になりました。」

「こんな魔力を全然感じない男に・・・？」

この世界は魔力基準だな・・・

「キルアは魔力が無くても凄い強いんだよ！」

「本当にそうかしら・・・。」

「なら自分の納得の行く試し方をすればいい・・・。」

「そう・・・分かったわ。」

杖を向けて来たな・・・魔法か・・・

「えっ！？母さん、待って！」

「避けられるかしら？」

雷の魔法を奴は放って来た・・・普通に避けられるな・・・

ビッ、ビッ

「一步も動いてないのに無傷！？」

「何を言っている・・・ちゃんと避けた・・・まあ攻撃を受けたとしても無傷だが・・・。」

あれぐらいではな・・・

「動いたと言うの・・・全く分からなかった・・・。」

「どうこれがキルアの実力だよ！」

「・・・分かったわ、フェイトこの男に協力してもらいなさい。」

「あつ、ありがとうございます。」

「プレシアのあんなに驚いた顔なんて初めて見たね！」

「あつ、アルフ！」

アルフ・・・お前も初めは驚いていたよな・・・。

「じゃあ帰ろうか、キルア。」

「そうだな・・・。」

「ちょっと待ちなさい．．キルア、貴方に話があるわ。」

「何だ？」

「フェイトとアルフは部屋から出なさい。」

「はっ、はい。」

二人きりで話し．．奴は俺に何の話がある．．？

「キルア、質問いいかしら？」

「別にいいが．．。」

「貴方、何者？」

「俺はキルア．．旅の格闘家だ．．。」

「そう言う事を聞いてるんじゃないわ．．貴方の力についてよ。」

「あれは修業で培った力だが？」

「修業ですって．．！？」

「それにあの位の動き．．俺の知ってる世界の奴は大体できたぞ．．？」

「貴方．．一体どんな世界を生きて来たの．．？」

「そこまで答える義務は無いな。」

「そう・・・分かったわ。」

「今度はこちらから質問していいか？」

「何？」

「あの壁の向こうから・・・死んだ者の匂いがするのは何でだ・・・？」

「・・・！？」

「まあ・・・余りにも言いたく無い事なら話を無くていい・・・。」

「そう・・・ありがとう・・・。」

「あと一ついいか？」

「何？」

「お前、病気だろう・・・。」

「・・・！？何で分かるの・・・。」

「お前の気の流れが乱れていたからな・・・。」

「気？」

「人の中に流れる生命エネルギーだ・・・。」

「そうなの・・・。」

「お前にこれをやろう・・・。」

俺は袋から薬を取り出しプレシアに差し出した。

「これは・・・?。」

「薬だ・・・飲め・・・良く効く奴だ。」

「あつ、ありがとう。」

「病気を治したら、フェイトに対する・・・自分の中で押し殺している感情に・・・素直になるんだな。」

「・・・!?。」

「では俺はフェイトの所に行こう・・・。」

プレシア S a d e

あのキルアという男・・・何なのまるですべてを見透かしてるよう・・・。

「フェイトに対する気持ちか・・・。」

確かに私の心の中にはあの子を・・・フェイトを・・・道具ではなく・・・もう一人の娘として見ようとした気持ちがあるのかもしれない・・・

「だつて・・・」

あの子の私に対する感情が余りにも純粹なのだから・・・

「でも・・・。」

今更考えたつて無駄よね・・・。

「私の体はもう長くない・・・。」

そう言えばさつきキルアから薬をもらつたわね・・・本当に効くのかしら・・・私の体の病はそう簡単に治るものじゃ・・・。

「騙されたと思って・・・飲んでみるかしら。」

ゴクン・・・あれ・・・これは・・・

「か、体が軽くなった・・・。」

まっ、まさか治つたつて言うの!?

「こんな薬を持つてゐるなんて・・・キルア・・・貴方、本当に何者なの・・・?」

キルア S a d e

「むっ・・・。」

「どうしたのキルア？」

「いや・・・何でもない・・・。」

「そう？じゃあ家に帰ろう。」

「そうだな・・・。」

プレシアの気の流れが正常になった・・・ちゃんと薬を飲んだようだな・・・

「明日からはキルアも一緒にジュエルシード集めだね、がんばろう！」

「ああ・・・そうだな。」

明日からジュエルシード集めか・・・フェイトの身をちゃんと守らねばな・・・そんな事を考えながら俺はフェイト達とともに帰路についた・・・。

石集めを協力する事にした格闘家（後書き）

キルア「次からはジュエルシード集めか・・・。」

作者「一応そうですね。」

フェイト「キルアがいるからとっても安心だよ！」

作者「確かにキルアさんチートですからどんなことあっても対応してくれますからね。」

キルア「世の中には俺より強い奴もいる・・・。」

フェイト「謙虚なんだね、キルアは！」

作者「あのお二人さんよろしくお願いします。」

フェイト「はい！」

キルア「では次回も・・・。」

フェイト「どうかこの小説を見てください！」

欲深き者には破滅のみ。
(前書き)

重要なオリキャラ登場！

欲深き者には破滅のみ。

「はああ・・・。」

今キルアは気を高め練り上げていた。己の体が鈍らぬように・・・これをかれこれ朝の三時から四時間は続けている。

「ふう・・・これぐらいで良いか・・・さて・・・戻るとしよう。」

アルフ Side

「ふぁー・・・ん?」

キルアがいないねえ・・・。

「どこいったんだい・・・トイレかな?」

「トイレじゃ無いぞ。」

「わっ!?」

いつからそこに!?

「急に現れないでおくれよ、心臓に悪いじゃないか!」

「次からは気をつけよう・・・。」

「まったく・・・。」

「さて・・・朝飯でも作ろうか・・・。」

「ふぁ・・・おはよう、アルフ、キルア。」

「おはよう・・・フェイト、今から朝飯を作るから待っていてくれ・・・。」

「うん、分かった。」

「食べたらジュエルシード探しだね。」

「そうだな・・・。」

このあと私とフェイトはキルアの作った朝ごはんを食べた。やっぱり美味しかったね。

キルア Side

「さて・・・行くか。」

「そっぴゃキルアって飛べるのかい？まあアンタなら走ってもついてこれそうだけど・・・。」

「飛べるぞ・・・。」

「魔力もないのにどうやって飛んでるの?。」

「それは気力だな・・・。」

「気？」

「簡単に言えば生命エネルギーだ・・・。」

「ふーん・・・アンタの強さの秘密はそれかい？」

「まあ・・・そうかな・・・。」

まあ・・・別の力も俺は持っているが・・・それは戦いでは滅多に使わないしな・・・

「気かぁ・・・私も使えるかな？」

「修業をすればな・・・。」

まあ・・・フェイトは魔力の資質が高いから気よりも魔力を高めた方がいいだろうが・・・。

「さて・・・話はこれぐらいにしてジュエルシード集めを開始しよう・・・。」

「うんそうだね。」

俺達はジュエルシードがあるのかまだ探索されていない場所に向かった。

「この辺りはまだ探してないんだよね。」

「では探すでしょう・・・。」

「あつ、キルア、ジュエルシールドに衝撃とか与えちゃダメだからね。」

「分かった・・・。」

大方・・・暴走でもするのだろうな・・・。

「さて・・・あの石の力を探ってみるか・・・。」

ふむ・・・感じないな・・・。

「力が発動してる状態ならすぐに見つかるのだろうがな・・・。」

神経をもっと研ぎ澄ますか・・・。

フエイト Side

「んー反応ないなー。」

ジュエルシールドが発動していないのか、それともただ無いだけなのか・・・。

「もっと頑張つて探さないと・・・。」

お母さんの為にも・・・。

「フェイトちゃんみつけた・・・プヒヒ。」

「えっ、何!？」

「ジュエルシード探してるんでしょ・・・ぼくちん持つてるよ、しかも原作じゃ見つからなかったのをね・・・プヒヒ。」

「・・・原作？」

「ジュエルシード欲しいんでしょ、ぼくちんのお嫁になるならあげるよ・・・プヒヒ。」

「な、何言ってるのこの人・・・」

何か・・・怖い。

「まあ、嫌って言うてもお嫁にするけどね・・・プヒヒ。」

「ひっ、さ・・・サンダースマッシャー!」

バチィ!

「やつ、やった・・・?」

「だめじゃないか! 未来の旦那様に攻撃しかけちゃ! それにぼくちんはSSSランクの魔力を持つてるんだからこんなのきかないよ!」

「あ・・・ああ・・・。」

「ちょっとおしおきしなきゃいけないかな。」

「ひっ……。」

怖い……助けて……キルア！

「おい……フェイトに何をしようとしている……。」

「プヒヒ!？」

「キルア!」

キルア Side

ジュエルシードの力を感じて、その場所にフェイトと知らない奴の
気を感じ、何かと思い……来てみたらこんな事になってるとはな……

「プヒヒ……なんだお前は？」

「それはこっちの台詞だ……貴様は何者だ……。」

「ぼくちは転生者さ。」

転生者……会うのは二人目だな……。

「そうか……転生者か……。」

「プヒヒそれよりもお前は誰かって聞いてんだよ、ぼくちをおこ
らせるの怖いよ。」

「別に貴様が怒っても怖くはないが・・・まあ・・・答てやる、俺はキルアだ・・・」

「キルアだつて？そんな奴原作にいたかな？」

「キルア、助けに来てくれたんだね、ありがとう！」

「ああ・・・無事のような・・・フェイト。」

「プヒヒー！お前何フェイトちゃんと仲良くしてんだぶっ殺すぞ！」

「殺れるものならな・・・」

「なめやがつてー！くらえー！SSSランクま・・・」

ドガッ。

「プヒヤフ！？いたいよーお前なにしゃがつた！」

「普通に殴っただけだが？」

「うそつけーお前がなぐるとこなんか全然みえなかったぞ！」

「貴様に目視できない速さなだけだろう・・・」

「くっそーお前も転生者だったんだなードラゴンボール基準の力もらいやがつてーずるいぞー！」

「俺は転生者じゃない・・・」

「うそつくなー！転生者でもない奴がこんな力、もってるわけないだろ！」

「それより・・・貴様、ジュエルシードを持っているな・・・大人しく渡せ・・・。」

「嫌にきまつてんだろぅがー！くそこうなったらジュエルシードの力を使う！」

「えっ！？」

「プヒヒ・・・プヒッ、力がみなぎる。」

「確かに魔力が上がったみたいだな・・・。」

「くたばれー！！」

「キルアー！」

「・・・。」

「シャッ、ドゴォー！」

「ブビィ！？」

「ジュエルシードは貰うぞ・・・。」

「簡単に倒しちゃった・・・やっぱりキルアは凄い！」

「さて・・・ジュエルシールドも一つ手に入った事だし・・・フェイト、アルフを呼んで帰るぞ・・・」

「うん、そうだね。」

俺とフェイトはアルフを呼びに向かった・・・

キルア Side OUT

「ぐぞー壊れチート転生者め・・・。」

「彼は転生者では無い・・・。」

「!? 誰だ・・・お前。」

「私はある御方の使者だ。」

「神の・・・か?」

「・・・力が欲しくはないか?」

「な・・・に・・・?」

「素晴らしい力をあげようと言っているんだ、君の知っているドラゴンボールとかいう漫画のキャラとやらの力を遥かに越える力を・・・。」

「ほんとか!?」

「本当だとも。」

「どのキャラより強い力だ!？」

「計測では超一星龍とかより遥かに強いな。」

「何!？くれ．．．いますぐ、くれ!」

「焦らなくとも、すぐに渡そう．．．受けとれ!」

ある御方の使者は転生者の胸に光る玉を押し込んだ。

「プヒッ?プヒィー!」

「力は与えてやったぞ。」

「ミナギ．．ル、チカラガミナギルゾ。」

「．．．（精神が壊れかけているなこいつの精神力はこんなものか．．．）」

キルア Side

「むっ．．．。」

何だ．．この巨大な気は．．。

「キルア、やっぱアンタ凄いねえ、SSSランクの魔力のうえにジユエルシードの力使う奴あっさりやっちゃうなんてね・・・どうしたんだい？」

「巨大な気がこちらに向かってくる・・・。」

「何だって!？」

「キルア・・・コロス」

「な、何だいコイツ。」

「この人・・・さっきの転生者とかいう人に少し似てる・・・。」

「しかし・・・気の性質は全くの別ものだが・・・。」

「ウガガ・・・シネツ！キルア！」

ブオン！

「スピードもさっきとは全く別ものだな・・・だが・・・捉えきれる。」

ガッ。

「ウケトメタ、ダト!？」

「この位では俺を倒せん・・・。」

だが・・・どうやって、この短い時間の間にこんな力を身に付けたん

だ．．？

「ヴ．．ベボラ．．ガギグヤチャベ．．．。」

「！．．．フェイト！アルフ！目を閉じろ！」

「えっ、何で？」

「何で閉じなきゃいけないんだい？」

「いいから早くしろ！」

この技は．．見られたくないからな．．。

「わ、分かった．．。」

「閉じるよ．．。」

「それでいい．．。」

「ヴグオアエ！」

「久々に使うな．．この技を．．」

今は殺意の波動なしで使えるとはいえ．．使えば殺意の波動に響くからな．．。

「くられ．．．瞬獄殺。」

ドガガガガガガガガガガッ！キン！！

「ガ．．．ガ．．ガ．。」

ボシュツ！

「もう開けていい？」

「ああ．．。」

「ありや？さっきの奴は？」

「消滅させた．．。」

「え．．．殺したの。」

「奴は精神が崩壊して力を暴走させ爆発しそうだったからな．．人殺しと言うならそう呼んでも構わん．．事実そうだからな．．。」

「ううん．．言わないよ．．だって仕方なかったんでしょ．．私たちを守るために．．。」

「そうだよ、キルア、アンタが気にすることはないよ！」

「そうか．．」

だが．．俺が人殺しなのは間違いない．．なぜなら．．

「それよりもキルア、早く帰ろう！」

「そうだよ、帰ってゆっくり休もうじゃないか。」

「そうだな・・・。」

それにしても・・・奴はどうやってあんな力を手に入れたんだ・・・。

キラア S i d e O U T

「ふむ、やはりこうなったか・・・それにしてもあの男の力は・・・あの御方に報告しておくか・・・。」

この謎の使者は何者なのか・・・そしてあの御方とは・・・？

欲深き者には破滅のみ。（後書き）

作者「いやーみごとにオリ展開フラグたったな。」

キルア「大丈夫なのか・・・？」

作者「頑張ります・・・。」

フェイト「それにしても私キルアに全然ついていけない・・・。」

作者「一応、フェイトもパワーアップさせようかとは思っただけど・

・」

フェイト「本当！」

作者「でもキルアには結局は全然及ばないと思うけど。」

フェイト「だよね・・・。」

キルア「人には可能性というものがある・・・フェイトが俺より強くなる可能性もあるだろう・・・すぐには無理だが。」

フェイト「そう言ってくれると嬉しい・・・ありがとうキルア！」

キルア「・・・普通の事を言ったただけだが・・・。」

作者「では読者の皆様どうか次回もこの作品を見てください。」

フェイト「次回もどうかよろしくお願いします！」

キルア「次回もよろしく頼む・・。」

転生者再び！（前書き）

バカな転生者再び！

転生者再び！

キルア Side

「・・・フェイトちょっと昨日、転生者から手に入れたジュエルシードを見せてくれ・・・」

「うんいいよ？」

「・・・。」

「どうしたの？」

「いや・・・何でもない・・・。」

「そう?・・・そう言えばこのジュエルシード原作では見つかったないジュエルシードとか言ってたな昨日の転生者って人。」

原作?それにしても・・・昨日の違和感は確かな物だったか・・・このジュエルシード最初に見た物とは、何か違う・・・ほとんど同じなのだが・・・。

「では、ジュエルシードは返すぞ。」

「うん。」

「さあ今日も、はりきってジュエルシード探そうかね。」

「そうだね、アルフ。」

「いや・・・今回は俺だけで探しに行こう・・・。」

「えっ、何で？キルア。」

「フェイトにアルフ、お前らは俺と会う前から休まずにジュエルシードを探してるんだろう・・・たまにはゆっくり休め・・・。」

「えっ、でも・・・。」

「分かったよ・・・キルア、アタシとフェイトは今日は休むよ。」

「アルフ!？」

「フェイト確かにキルアの言う通りだフェイト特にアンタは無茶してるじゃないか。」

「で・・・でも・・・。」

「フェイト、休息も時には重要だ。」

「わっ、分かったよう・・・キルアと一緒に探したかったのに・・・キルアのバカ・・・。」

「何か言ったか？」

「なっ、何でもない!」

「そうか・・・朝飯と昼飯は冷蔵庫に作り置きしてあるのがあるからそれを食べてくれ・・・夕方までには帰る・・・では行って来る。」

「気をつけてね、キルア！」

「ああ・・・分かった。」

俺はフェイトがまだ探してないと言っていた場所に向かった。

「ふむ・・・では神経を研ぎ澄まして・・・。」

「見つけたぜえ！」

「お前は・・・最初に会った転生者。」

「覚えていたか！」

「まあ・・・一応・・・。」

「ムツカツクなテツメエ・・・。」

「ジュエルシード探しで忙しいんだ・・・相手にしてる暇は無い。」

「ここにやジュエルシードはねえよ！原作にこんな場面はなかったからなあ！」

「原作？」

フェイトが言うには昨日の転生者も原作がどうか言っていたらしいな・・・情報を引き出すか・・・。

「おい、原作ってなんだ・・・？」

「それやこの世界のアニメだろ！」

「アニメね・・・。」

「もしや・・・この世界は知り合いの科学者が言っていた漫画とやらによく似た世界・・・そんな所か・・・？」

「おい・・・原作で見つかっていないジュエルシードってのはあるのか？」

「はあ？何言ってるの？全部見つかってんだろお前、にわか転生者なの？」

「俺は転生者じゃない・・・。」

「原作ではジュエルシードは全部見つかっている・・・か・・・では昨日の原作にはないジュエルシードと言うのは一体・・・？」

「転生者じゃないって・・・じゃあお前のその力なんだよ！？」

「まあこの世界はあくまでもよく似た世界・・・原作とやらと違う所もあって当然だな・・・」

「テツメエ・・・何者だ！？」

「ただの・・・旅の格闘家だ。」

「そんな答えで納得できると思ってんのか！パワーアップした俺の力でぶっ・・・」

トンッ

「情報提供・・・礼を言う・・・無駄に戦うのは好まないんで・・・気絶してもらっ」

「あ・・・あが。」

「さて・・・」

色々気になる事はあるが・・・ジュエルシード探し・・・再開だ。

「ふむ・・・この辺りには無いようだな・・・」

あれだけ探したのだから間違いないな・・・。

「そろそろ、夕方だ・・・帰るか。」

今回の収穫は無しか・・・

フェイト Side

「キルア・・・そろそろ帰ってくるかな？」

ガチャ

「今戻ったぞ・・・。」

「あつ、お帰りキルア！」

「んで？ジュエルシードは？」

「すまないな・・・見つからなかった・・・。」

「きつ、気にしないでいいよ！明日、私と一緒に見つければいいんだから！」

「ねえ・・・フェイト、私にとって事はアタシ抜きかい？」

「あつ、アルフそういう事じゃないよ！」

「ごめん・・・ちょっと忘れてた。」

「そう・・・ならいいんだい。」

「今日はジュエルシードを見つけれなかった詫びに特別な料理を作ろう・・・。」

「特別な料理？」

「何だろう・・・気になるな。」

「ウヤパマチヨスだ。」

「ウヤパマチヨス！？」

全然聞いたことないよそれ!?

「それ・・・美味しいのかい?」

「ああ・・・美味しい。」

キルアがあんなに笑みをこぼすなんて・・・どれだけ美味しいんだろう?
う?

「では・・・作るのに取り掛かるう。」

「楽しみにしてるよ、キルア。」

料理中~~~~料理終了。

「出来たぞ。」

「凄いこんなの見たことない!」

「いいにおいだねえ〜いただきます!」

ガブツ・・・もぐもぐ

「どうだ?アルフ。」

「これは!?!説明できないけど美味しい!すっごく美味しい!」

「じゃあ、私も。」

パク・・・もぐもぐ。

「美味しい・・・これすごく美味しいよ！」

「そうか・・・喜んでくれて何よりだ。」

「これ、材料何なの？」

「チムウマムとウラパラルにカリマミナグだ。」

「聞いた事ない食材だね？」

「まあ・・・貴重だからな。」

「これ・・・母さんにも食べさせてあげたいな・・・。」

「そうか・・・では届けて来よう。」

ブン・・・

「えっ・・・？」

キルアが・・・急に消えた！？

プレシア Side

「・・・・・・。」

「どうした、そんなに驚いた顔をして？」

「普通、目の前に人がいきなり表れたら驚かないかしら？」

「ふむ．．それもそうか．．。」

「と．．言うよりどうやってこの場所に來たの？フェイトは一緒にやないみたいだし。」

「俺の力を使って來た．．このぐらいの移動なら大丈夫なんでな．．。」

「本当．．貴方すごいわね．．ああ、それと礼を言わなきゃ．．病氣、調べた所完全に治っていたわ．．ありがとう。」

「別に礼を言われる事はしていない．．。」

「所で何しに來たの？」

「これを渡しに來た。」

「これは．．？」

何これ．．いい匂いはするけど．．。

「ウヤパマチヨスと言う料理だ。」

「ウヤパマチヨス？聞いた事ないわね．．で、何でこれを私に渡しに來たの？」

「フェイトがこれをお前に食べさせてあげたいと言ったからだ。」

「!?!?そう・・・。」

「じゃあ・・・俺はフェイト達の元に帰るぞ・・・。」

「待って!」

「何だ?」

「フェイトに今度一緒に・・・ご飯食べましょって伝えて・・・。」

「・・・分かった。」

ブン・・・

「・・・言っちゃったわね私・・・以前なら絶対あんな言葉考えられないわ・・・。」

私の心が病がなくなつた事で変わってるのかしら・・・。

「とりあえず頂こうかしらウヤパマチヨス。」

パク・・・もぐもぐ。

「美味しい・・・!?!?」

それに何かお肌のツヤが良くなってる!?

「これは素晴らしいわ・・・。」

キルア Side

「戻ったぞ・・・。」

「どこに行ってたのキルア？」

「プレシアの所だ。」

「母さんの所に!？」

「フェイトが母さんにこの料理食べさせいと言ったからな届けて来た。」

「そうなんだ・・・ありがとうキルア!」

「礼を言われるほどの事ではない・・・それよりも、フェイト・・・近々良い事があると思うぞ・・・。」

「えっ、何？」

「さて・・・何だろうな？」

全て伝えるよりも・・・こちらの方が分かった時に嬉しいだろう・・・。

「さて・・・俺もウヤパマチヨスを食べるか・・・。」

「あーゴメン、キルア。」

「何だ・・・アルフ？」

「アンタの分まで食べちゃった・・・ウヤパマチヨス。」

「何・・・！？」

「ごめん・・・キルア私は止めたんだけど・・・。」

「いや・・・いい・・・俺は別の物を作って食べよう・・・。」

ウヤパマチヨス・・・楽しみだったんだがな・・・。

転生者再び！（後書き）

フェイト「ウヤパマチヨス美味しかったね。」

アルフ「本当あの味は忘れられないよ！」

「あの料理が喜んでもらえて何よりだ．．．」

フェイト「それにしてもキルアは大人だね、自分の好きな食べ物取られても怒らないもん。」

「キルア、そうか……？」

アルフ「アタシだったら怒るね。」

フェイト「アルフ……自分の怒る事、人にしちゃ駄目だと思うよ……」

アルフ「うっ、そうだね・・・。」

「怒るって、どのくらいだ？」

アルフ「何とってんだい!! ぐらいかな。」

キラア「何だ、軽い方だな・・俺の知ってる奴は食べ物取ったらクレーター何個も作るぐらい暴れるぞ・・。」

「それ……異常だと思うよ……。」

作者「読者の皆様これからこの小説をどうかよろしくお願いします！」

フェイト「次回も見てくださいね！」

アルフ「よろしく頼むよ！」

キルア「どうか・・・この小説を見てくれ・・・。」

白き魔法少女との出会い（前書き）

リリカルなのはの主人公高町なのは登場！

白き魔法少女との出会い

「キルア！ジュエルシードの反応があつたよ！」

「ん？何処だ？」

「ちょっと遠いけど海鳴つて所。」

「では・・・すぐに向かうか・・・。」

「アタシは別のジュエルシードを搜索するよ。」

「転生者とか言う奴等がいるからな・・・気をつけろよ・・・。」

「分かつてるって。」

キルアとフェイトは海鳴のジュエルシードの反応がある場所に向かった。

「ん？何だ・・・あの辺り、空間が灰色になっているぞ・・・。」

「あれは・・・広域結界！？」

「見た所、辺りの空間との時間軸をずらす結界術か・・・。」

「でもこれが発動してるという事は・・・私以外の魔導師がいる。」

「そうか・・・では、ジュエルシードの元に向かうぞ、フェイト。」

「うん。」

キラアとフェイトはジュエルシードの元へと向かう。そしてその場所には巨大な猫と白い魔法少女とフレットがいた。

「でかい猫だな・・・。」

ジュエルシードの気配を感じるな・・・あの猫。

「何だろうあの人たち？」

「あれは・・・！？」

片方の格闘家風の男はともかく、もう一人の少女は僕と同じ世界から来た魔導師！？まずい！今のなのはじゃ勝てない！

「フェイト、さっさとジュエルシードを回収しよう。」

「うん、そうだね！」

「ちょっと、何を言ってるのあなたたち！ジュエルシードはユーノ君のなんだよ！」

「証拠は？」

「えっ、証拠はユーノ君がそう言ったから……。」

「そう言ったからか……果たしてそれは本当の事なのか？」

「えっ？」

「巨大な力を持つジュエルシードを自分の手に置くための嘘だったら？」

「なのは、僕は嘘なんか言っていない！」

「……私は……私はユーノ君を信じる！」

「なのは！」

「信じるか……迷いのない、いい目をしてるな……だが……周りをよく観察する目はまだまだだな。」

「えっ？」

「キルアー！ジュエルシード封印完了したよ！」

「えっ！？」

キルアがなのはとユーノと会話している間にフェイトがジュエルシードを封印していた。

「喋ってる間に……卑怯だぞ！」

「喋って、隙だらけなのが悪いんだよ？」

「なに！？」

「貴様は格闘技の試合中に余所見をした選手がやられて、相手の選手に卑怯だと言ったらどう思う？」

「え、それは余所見した方が悪いんじゃないや……。」

「そうだ……余所見した方が悪い……だからフェイトの行為を卑怯だと言うのは間違いだ。」

「ぐっ。」

「キルア、あの子……ジュエルシードいくつか持ってるね。」

「ああ……だな。」

「茶髪の少女……なのはとか言っただな大人しくジュエルシードを渡せ……無駄な争いは好まん。」

「嫌です！これはユーノ君のなんです！」

「君たちはジュエルシードを集めて何をしようとしているんだ！？」

「……知らん。」

「知らんって……。」

「何をするかは本当に知らん。」

「母さんの研究に必要なって事は聞いてるけど・・・私も何をするかは知らないや・・・。」

「ジュエルシードの危険性が分かっているのか!？」

「いや・・・正直、手に終えん物では無いと思うな。」

「魔力も無い人間が何を言っているんだ!」

「魔力が無くてもキルアには気があるんだよ!」

「気?」

「生き物に流れる生命エネルギーだよ!」

「生命エネルギーって・・・それは一体どれほどのものなんだ・・・?」

「別に貴様に見せる必要はない。」

「なっ。」

「それよりもそのあなた・・・ジュエルシードを渡して。」

「嫌です!」

「じゃあ力づくでも。」

フェイトはバルディッシュを構えた。

「！・・・戦うしかないんだね。」

なのはもレイジングハートを構える。

「フェイト。」

「キルアは手出ししないで・・・ここは私だけでやるから。」

「そうか・・・分かった。」

今二人の魔法少女が激突しようと・・・

「お、いたいたフェイトちゅわん！」

「えっ、何！？」

「お呼びじゃない、なのはもいるぜー。」

「あなたもしかして・・・転生者！？」

「え、何で分かったの？もしかしてあつたことすでにあんの？」

「・・・まあね。」

「てか、その格闘家風の男も転生者？」

「これと言つのは何度目だろうか・・・俺は転生者じゃない・・・。」

「ふーん、まあいいや・・・とりあえず、なのは死んどきな！この白い魔王め！」

転生者3はなのはに向かってSSSランクの魔法を放とうとした・・・だが

ガッ

「へ・・・いつの間に？」

キルアが転生者3の腕を掴んでいた。

「おい・・・貴様、いきなりこのような少女に向かって白い魔王と言う発言と殺そうとするのはいけないんじゃないか？」

「か、彼いつの間にあの転生者と言う奴の腕を掴んでいたんだ！？」

「あの人、私を助けてくれたの？。」

「うぎ、放せ！」

「分かった・・・。」

パッ

「たく、いてえじゃんよ・・・さて、なのは殺そ。」

「何を勘違いしてるんだ？」

「へ？」

「俺は腕を放しただけで貴様を倒さんとは言っていないぞ・・・？」

「なんだと！？」

「心配するな・・・死なんぐらいの力加減でやってやる・・・。」

「んだと！」

「羅刹旋風脚！」

ギョオオ！

「ぐばあ！？」

「黒龍拳！」

ドガッ、ガッガッガッガッガッ！

「あべし！？」

「業・波動拳！」

ドンッ！

「うばあ！」

「ふう・・・久しぶりにこれらの技を使っ たな、たまには使わんとな・・・。」

「何が起こつたんだ・・・？」

「技を使ってこいつを倒しただけだ。」

「技を使つてたのか!？」

「フェイト、余計なちゃちゃが入った事だし今日はもう帰ろう・・・
ジュエルシードを集めていればまたいずれこいつらとは会つだろう。」

「うん、そうだね。」

キルアとフェイトは帰ろうとするが・

「待って!」

なのはが呼び止めた。

「何？」

「私、高町なのは!あなたの名前は。」

「・・・」

「フェイト、名を語られたら返すのが礼儀だ。」

「うん・・・私はフェイト・テストロッサ。」

「フェイトちゃんだね・・・あのそちらの私を助けてくれた人は・・・」

「？」

「キルアだ。」

「キルア・・・さんですね。」

なのはは顔を赤らめながらキルアの名を呟いた。

「?・・・行くか、フェイト。」

「・・・・。」

「どうした？フェイト。」

「なっ、何でもないよ!」

あの子もしかしてキルアの事・・・。

「む・・・この転生者はこんな所に置いておけんから山奥に捨ててくる。」

「えっ?」

「こんな奴をこんな所に放置していいと思うか？フェイト。」

「思わない。」

「だろう・・・。」

そう言つとキルアは転生者を抱えて消えた。

「あつ、消えた!?!」

「すぐ戻つてくるよ。」

「戻つて来たぞ。」

「早つ。」

「まだ遅いほうだ・・・。」

「あれで遅いのか!?!」

ユ一ノは凄く驚いた。

「じゃ、キルア帰ろう。」

「そうだな。」

キルアとフェイトは家に戻るのだった。

「・・・。」

「なのは?」

「あの人かつこよかったな・・・。」

「え？今なんて？なのは。」

「なっ、何でもないよ！」

一人の少女は恋に芽生えたようだった・・・。

白き魔法少女との出会い（後書き）

フェイト「・・・。」

キルア「フェイトはどうしたんだ？」

作者「乙女には色々あるんですよキルアさん。」

キルア「そうか？」

フェイト「（恋のライバルが増えちゃったよ・・・。）」

作者「（そもそもキルアさん恋愛事、興味無しだけどね・・・。）」

アルフ「私、出番少なかった・・・。」

作者「すいません次回ちゃんとけっこう出ますよ。」

アルフ「そう?。」

作者「では読者の皆様どうかこの小説をこれからもよろしく願います。」

フェイト「次回もどうか見てください!。」

アルフ「次回もよろしく頼むよ!。」

キルア「こんな小説だが次回もどうか見てくれ。」

溢れる思い・・・嬉しい涙（前書き）

プレシアが本当にいい母親って感じですよ！

溢れる思い・・・嬉しい涙

「プレシアにジュエルシードを今どれくらい集まったか報告しに行ってみたらどうだ？」

キルアはフェイトにジュエルシード集めの報告を提案した。

「うーん・・・そうだね行こうか。」

「何言ってるんだいキルア！まだ報告しに行く必要なんかないよ！」

アルフは怒り気味に反対した。

「アルフ・・・でも報告は必要だと思うよ？」

「でも・・・。」

「とにかくプレシアの所に行くぞ。」

「何でキルアが妙に行く気があるんだい？」

「・・・。」

プレシアがフェイトと共にご飯を食べようと言っていたからなど今は言えんな・・・それではサプライズにならんからな・・・。

「少しプレシアに聞きたい事があるだけだ。」

「ふーん・・・そうかい。」

「じゃあ・・・行くよ。」

フェイトは転移魔法を展開した・・・そしてプレシアの元へ。

「よく来たわね・・・フェイト。」

「?・・・。」

母さん・・・雰囲気が違う・・・?

「それで、何をしに？」

「あつ・・・ジュエルシード集めの報告を・・・。」

「そう・・・現在、幾つなの？」

「みつ、三つです・・・。」

これぐらいじゃやっぱり怒られるかな・・・。

しかしフェイトの予想とは違う行動が返ってきた。

「そう・・・まだまだ全部には程遠いけどよくやったわね、次からも

頑張りなさい。」

「えっ!?!」

フェイトは予想とは違う答えに驚いていた・・・その横でアルフも思わず口を開けて驚いていた・・・。

「フェイト、この前ご飯と一緒に食べましょって伝えていたわよね。」

「え・・・!?!」

プレシアの言葉を聞いたフェイトはもの凄く驚いた顔をした。キルアがちゃんと伝えていないから当然である。

「えっ!?!何を驚いた顔してるのフェイト・・・私はちゃんとキルアに伝えてって・・・。」

「えっ・・・聞いてないよ!?!キルア!。」

「ん・・・伝えたぞ?近々良いことがあると・・・。」

「え?あれがそうだったの!?!」

「キルア、何でちゃんと伝えなかったの!?!」

「そちらの方がフェイトの喜びも大きいだろう?サプライズと言う奴だ。」

「・・・意外ね貴方、真面目そうだからサプライズなどと言うものには興味無さそうなのに・・・。」

「・・・仲間から学んだ事だ。」

「仲間？キルアの仲間ってどんな人達？」

「面白い人達だ・・・。」

あの人達は元気だろうか・・・。

「それよりもプレシア、フェイトと一緒に、ご飯を食べるんだろう。」

「そうだったわね・・・アルフ、それにキルア貴方達も一緒にどう？」

「へっ！？アタシもかい！？」

「いいのか？」

「だって貴方達はフェイトの大事な人でしょ？」

「俺は一緒にいた期間が短いけど・・・。」

「一緒にいた期間なんて関係ない！キルアは大事な人だよ！」

フェイトは力を込めてそう口にした。

「大事な人か・・・そう言われると嬉しいものだな。」

「えっ！？嬉しいって・・・」

フェイトは頬を赤く染め、キルアを見た。

「俺もフェイトは大事な人だと思っている・・・」

「え・・・！？」

フェイトは今の言葉で顔を真っ赤に染めた・・・しかし・・・

「そう・・・大事な妹の様なものだと思っている。」

「え・・・？」

なんだ・・・妹の様なものか・・・。

フェイトはがつくりと頭を下げた。

「何を落ち込んでいるんだ？フェイト。」

「何でもない！」

「？・・・。」

「・・・クスッ。」

「母さん？」

「いや・・・フェイトの反応を見てたら可笑しくて・・・つい笑っち

やった。」

「え・・・母さん、笑ったの!？」

「だって貴方がキルアの前で表情を豊かに変えるんだもの・・・その貴方の反応が面白くて。」

「もー!母さん!」

「ごめんごめん、フェイト。」

フェイトとプレシアは笑いあっていた仲のよい親子のように・・・。

「あんなプレシア見た事ないよ・・・。」

「フェイト・・・幸せそうだな。」

「えっ、本当だ・・・フェイトすごくいい顔で笑ってる・・・。」

「あはは、母さんったら。」

「うふふ、ごめんフェイトでも反応が面白かったのよ。」

二人が笑いあっている所にキルアが口を出した。

「さて、そろそろ楽しい会話は食事をしながらにしないか？」

「あっ、それもそうね。」

「ねえ、ご飯を食べながらキルアの旅の話をしてよ。」

「それは私も知りたいわ、キルア、是非聞かせてほしいわ。」

「別に構わないが・・・。」

「母さん、キルアの旅の話し楽しみだね。」

「うふふ、そうね。」

「俺の旅の話などで盛り上げられるのか？」

「アタシも気になるし盛り上がると思うよ。」

「だいいが・・・。」

「どうかしら？」

テーブルの上にはプレシアの作った手料理が置かれていた。

「すごく美味しそう。」

フェイトは目を輝かせながらそう言った。

「いただきます！」

フェイトはそう言い料理を口にした。

「どう？フェイト。」

「もぐもぐ・・・うつ、うつ・・・グスッ。」

フェイトは急に泣き出した。

「どうしたのフェイト！？口に合わなかったの！？」

「うん・・・美味しいよ・・・ただ嬉しくて・・・とっても嬉しくて、
つい涙が出ちゃっただけ・・・。」

「フェイト・・・そんなに泣く程、嬉しかったの・・・ありがとう。」

プレシアはフェイトを優しく抱きしめた。

「おかあさん！うつ・・・うああん！」

「フェイト、ごめんね・・・こんな寂しくさせて・・・。」

私が自分の気持ちに蓋をしたがために・・・。
貴方が私のもう一人の娘・・・アリシアの大切な妹と言う事に気づ
いていたのに気づかないふりをして・・・。

プレゼントは何が欲しいアリシア？

んーとね・・・妹が欲しい！

えっ！？

だってそれなら、おかあさんがお仕事が忙しくて家に居なくても寂しくないもん！

ごめんねアリシア・・・今まで貴方の大切な妹に酷い事をしてきて・・・でもこれからは愛情をちゃんと注ぐわ・・・そして出来れば貴方も一緒に注いで欲しいわ・・・アリシア。

「フェイト・・・。」

「なあに母さん？」

「ジュエルシード集め続ける？貴方がしたくないならしなくてもいいわ。」

「えっ！？」

「だって危険な事もあるし・・・。」

「続けるよ・・・だって母さんの研究に必要なんでしょ？私、母さんの役に立ちたい。」

「フェイト・・・でも・・・。」

「それに危険な事なら大丈夫！だってキルアが守ってくれるもん！」

「フェイト・・・うんそうね、キルア・・・フェイトを絶対に守ってね。」

「当然だ。」

フェイトを守る事はすでに心に誓っているからな……。

「アンタら話すのもいいけど料理食べなよ。」

「あっ……そうだねアルフ。」

「キルアの旅の話を聞かせてもらおうかしら。」

「……本当に聞くのか？」

「聞く！」

「聞きたいわ！」

「本当に親子だな……二人は……。」

このあとキルアはくたくたになるまで旅の話をさせられた……。

溢れる思い・・・嬉しい涙（後書き）

キルア「話すというのは疲れるな・・・。」

フェイト「でもキルアの旅の話してて凄かったよ!」

アルフ「本当にねえ・・・てかアンタが次元を超える事ができたのも驚いたよ!」

キルア「俺がプレシアの所に一人で行った時点で気づくべきじゃないか?」

アルフ「えっ!?!」

フェイト「私、気づいてたよ。」

アルフ「あ、アタシだって気づいてたさ。」

フェイト「さっき驚いたって・・・。」

アルフ「あれはジョークだよ!」

キルア「（嘘だな・・・。）」

フェイト「それにしても凄いやね傷付いてもすぐに傷が燃えて直る人があるなんて。」

キルア「実際、あの回復力は凄まじかった・・・。」

作者「あの三人ともそろそろ・・・。」

フェイト「読者の皆さん次回もこの小説をよろしくお願いします!」

アルフ「読んでおくれよ!」

キラア「楽しんでもらえれば幸いだ・・・。」

気を使える様になりたい金髪の魔法少女（前書き）

フェイトがキルアから気を学びます！

気を使える様になりたい金髪の魔法少女

「ねえ、キルア。」

「何だ？フェイト。」

「私、気を使える様になりたい。」

「・・・しかし、フェイトには魔法があるだろう。」

「でも気を使える様になりたいの！」

「・・・分かった・・・しかしすぐに使える様には、なれんぞ。」

「うん！」

こうしてキルアによるフェイトの気の修行が始まった。

「・・・ねえ、キルア。」

「何だ？」

「立って、じっとしてるだけで気を使える様になるの？」

フェイトは不安げにキルアに問いかけた。

「いや、ならないが？」

キルアは真顔で使える様にはならないと答えた。

「えっ！？じゃあこれの意味は？」

「意味ならある・・・これは自分の中の気を感じれる様になるための修行だ。」

「自分の中の気を・・・」

「そう、まずは自分の中の気を感じられなければ気を使える様になる事を教えられん。」

「て、事はこれはキルアも通った道なの？」

「まあな・・・」

もつとも俺は一分で済んだがこれは言わんほうがいいな・・・

「じゃあ頑張るよ!」

「ふむ・・・では、まずは三時間・・・頑張れよフェイト。」

「さっ、三時間!？」

フェイトは三時間もこの体制でいる事に驚いた・・・しかしこれもキルアが通った道だと頑張る事にした・・・

三時間後・・・

「どんな感じだフェイト？」

「自分の中になんかこうポワッてるものを感じる・・・」

「それが気だ・・・それにしてもポワッとか・・・感じ方は人それぞれだしな・・・」

「ねえキルア、私もう気を使える？」

「いや、まだだが？」

「えー、まだなんだ・・・」

「気はそんなにいきなり使えるものではないからな・・・」

まあ個人差もあるが・・・何より戦闘一族なら生まれてからすぐに使えるだろうがな・・・

「次は昼飯まで組手をしようか。」

「組手？」

「軽く戦っただけさ。」

「きつ、キルアと？」

「そうだが、こちらは一切攻撃はしない・・・するのはフェイトだけだ。」

「そつ、そうなんだ良かった・・・。」

「しかし、ただ攻撃をするんじゃない・・・気を集中して攻撃するんだ。」

「気を集中・・・。」

「自分の中の気を攻撃する時の拳に集めたり・・・という感覚だ。」

「うん、分かったよキルア。」

こうしてキルアとフェイトの組手が始まった！

「はああ！」

フェイトは真っ直ぐキルアに向かって拳を突きだした！

パシッ

しかしあっさり止められる。

「気を全然集中出来てないぞフェイト！あと拳を突きだす時はもつと脇を閉めるんだ！」

「はっ、はい！」

「しかし今の突きは中々良かったぞ。」

「ほつ、本当！」

「ああ、さあ次だ！」

「はい！」

二人の組手が始まってしばらくたち・。

「いいぞフェイト！驚きだ！今日だけでここまで気を集中出来る様になるとはな。」

「そつ、そうなの？」

「それに格闘技の才能もあるかもな・。拳の打ち方や蹴りの放ち方が中々うまくなって来た。」

「それはキルアがどう直せばいいか教えてくれたから・。」

「しかしそれを早くにも学んだのは紛れもないフェイトの才能だ。」

「そつ、そうかな・。」

フェイトは照れながら頬を指でかいた。

「さて・。そろそろ組手は終わりにするか。」

「私、まだ続けたい！」

「そうか、なら続けよう。」

「いくよ！キルア！はああ！」

ガッ！

「また筋がよくなったな！」

「まだまだ！」

ヒュッ！シャッ！ビッ！

「いい動きの流れだ！」

「まだまだ良くなるよ！」

「その調子だフェイト！」

ヒュッ！ガッ！ドッ！

「いいコンビネーションだ！」

「えへへ・・・次いくよ！」

「来い！」

フェイトはキルアとの組手に夢中になっていた・・・特にキルアに誉められるのが嬉しいようだ。

二人の組手の時間がしばらく経つとアルフがやって来た。

「ちょっと二人とも昼の時間はもう過ぎてるよ！アタシはもうお腹ぺこぺこだよキルア！」

「それは済まなかったなアルフ。」

「ごめんね、ちょっと夢中になりすぎちゃった。」

「まったく・・・。」

「では・・・大急ぎで飯を作るか。」

「私もお腹ぺこぺこだから早く食べたい！」

「まあ・・・あれだけ動けばな・・・今日の飯はちょっと豪華にするか。」

「わーい、やった！」

「今日はフェイトが気の鍛練を頑張ったからな・・・。」

「次も頑張るよ！」

「うむ、毎日の積み重ねが大事だからな。」

「早く気を自由自在に使える様になりたいな・・・。」

「使える様になるさ・・・フェイトなら。」

「キルアにそう言われると嬉しいな。」

「何で俺にそう言われると嬉しいんだ？」

「・・・キルアの鈍感!!」

「何で急に怒ったんだ？フェイトは。」

「鈍いねえ・・・キルアは。」

「感は鋭い方だと思うが・・・？」

「戦いとかのはね・・・。」

「・・・？」

「こういうのは自分で気づくしかないよ。」

「努力しよう・・・いたい何の感が鈍いんだ・・・？」

「はぁ・・・。」

。フェイトも大変な恋をしたねえ・・・と思い悩むアルフだった・・・。

気を使える様になりたい金髪の魔法少女（後書き）

作者「フェイトが気を学びましたね・・・格闘魔法少女誕生か!？」

フェイト「格闘魔法少女かあ・・・いいかも!」

キルア「だが、今のフェイトでは気を使った実践はまだ厳しいな。」

フェイト「う・・・そうだよな・・・。」

キルア「フェイト、俺は今のフェイトではと言っただけだぞ?」

フェイト「それって・・・成長した私ならできるってこと?」

キルア「そうだ・・・フェイトは才能があるからな。」

フェイト「私・・・早く気を自由自在に使える様に頑張る!」

キルア「魔法の鍛練も怠ってはいけないぞ。」

フェイト「うん分かってるよ、キルア。」

作者「では読者の皆様こんな小説でしがどうか次回も見てくださいます!」

フェイト「次回もよろしくお願いします!」

キルア「次回もできれば読んでくれ・・・。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5695y/>

その者の拳は滅殺の拳

2011年11月24日18時46分発行